

巻頭言

「ヒマラヤ学誌」10号をお届けする。ヒマラヤ学誌は1990年、京都大学ヒマラヤ研究会（ASH）が母体となって創刊された。同研究会は、1988年度から1995年までの8年間、当時の文部省、厚生省から助成を受けた「京都大学ヒマラヤ医学学術登山計画」を研究の軸に、京都大学関連の医学・農学・霊長類学・社会学・文化人類学のフィールドワーカーが集まり、高所をフィールドとした学際的研究を行う母体として1988年10月に結成された。「京都大学ヒマラヤ医学学術登山計画」では、計19次にわたって全調査日数のべ5000日を要する学術遠征隊が組織され、そこで得られた学術所見を速報する場として本誌は機能してきた。ヒマラヤ学誌1-3号は、1991年度の秩父宮記念学術賞受賞の対象となった。1996年には、いったん科研費がとぎれたが、1997-99年には、辻本雅史を研究代表者としてネパール・ブータンを舞台とするフィールド教育学研究と、高知医大を中心とする中国雲南省、ニューギニアにおけるフィールド医学研究が展開され、その知見が報告された。主要なメンバーが重なる社団法人・京都大学学士山岳会（AACK）からも継続的な支援を受けている。

しかし、2000年発行の7号ののち、しばらく、大学の法人化に伴うオリジナルメンバーの管理業務の増加や職場の異動、学問領域の細分化などの研究環境の変化によって、1990年前後に構想した高所フィールドワークを従来のかたちで継続するよりも、時代に適応した「高所研究」の模索に数年を要した。この間、個別の研究領域における学術誌は増加の一途をたどっているが、領域横断的な学際誌はいまだに少ない。その意味で、本誌は、高所をフィールドとして、学際融合をめざす若手研究者に研究知見の報告の場を提供し、ヒマラヤ学誌に掲載された論文は、個別の研究領域の学術誌にも再三にわたって引用されてきた。

登山と学術研究の癒合を志して始まった本誌は、21世紀になって、「環境と人間の関わり」を考える実践的な高所研究という時代の要請に十分応え得る基礎資料と研究者コミュニティ構築してきた。2005年から、国立人間文化研究機構・総合地球環境学研究所に異動した奥宮清人をリーダーとする「人の生老病死と高所環境—高地文明における医学生理・生態・文化的適応」（以下「高所プロ」と略す）が発足し、Incubation Study（IS）、Feasible Study（FS）、Pre-Researchの段階を経て5年間の本研究へと進み、その成果は、ヒマラヤ学誌8-9号の主要な論文を構成するようになった。

ヒマラヤ学誌10号では、「高所プロ」の2008年度の成果を報告する論文が15本と「アジア高地文明」に関する研究者間のコレスポネンス、ならびにAACK会員が中心となって運営している雲南懇話会からの学術研究寄稿5本から構成されている。

ヒマラヤ学誌10号を契機に、「学誌」編集委員会は、その基礎の部分を生み出した「京都大学ヒマラヤ研究会」の成果を滋養としつつ、より発展をめざすための実践的研究を展開する責務をもつ「高所プロ」の両者が共同発刊することが現実的と判断した。本誌は、「高所研究」という登山・探検をぬきには実現できない研究手法を継承し、同時に、グローバ

ル化に伴う地球規模のコンテンポラリーな課題、すなわち「環境」、「文明」、「人間の安心・安寧」を、高所という特殊なフィールドに適用し、フィールドワークを通じて考究することをめざすものである。

「学誌」はこれまでも、高所環境と人の暮らしに関する学際的学術誌として多くの論文や特集、エッセー等を掲載し、広く引用されてきた。今後、地球研「高所プロ」の研究成果を中心とした本格的な高所環境問題に関する研究知見が本誌を通じて、社会に還元されてゆくことは、編集者にとっても喜ばしいことである。

本誌ではもちろん従来どおり、地球研「高所プロ」にとどまらず、多方面、多領域からの投稿を歓迎することにはかわりはない。

「ヒマラヤ学誌」は、高地における人と地球環境問題に関してコンテンポラリーな学融合的な研究を歓迎するが、同時に進化論的な人類誌への考察も視野に入れている。

私たち人間の祖先は、約700万年前にアフリカの草原で誕生し約200万年前にはホモエレクトスとして直立二足歩行を開始したとされる。今から約100万年前、一部のホモエレクトスがアフリカとユーラシア大陸の陸橋をわたってユーラシアへ向かった。

その後、東アジアへ到着したヒトは北京原人に、ヨーロッパではネアンデルタール人となった。多くのホモエレクトスはほぼ695万年の間はアフリカ大陸にとどまっていたようであるが、現生人類は、今から約5万年前にアフリカを脱し世界各地に拡散したという。この拡散のスピードはきわめて速いもので、数万年ほどの間に、ヒトはヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、そしてオーストラリアにまで達した。

このころまで人類は、数十人単位のグループを形成し、狩猟採集民として移動を繰り返していた。大きな人口の増加もなかったようである。しかし約1万年前に、人類は野生植物の栽培化と野生動物の家畜化による農業や牧畜を発明することによって、その歴史に大きな変革をひき起こした。農業の開始は、食糧生産を増やし食糧の貯蔵を可能にした。食糧生産にたずさわらない余剰の人員は軍人、官僚、技術者となって社会機構を進化させたが、同時に社会的、性的な不平等ももたらした。人類文化の多様性が增大したのは、部族間の差が広がったここ1万年ほどのことであろう。

当初、河川域の低地における農業の開始によって人類は定住生活を行うようになり、人口は爆発的に増加した。農業による食糧増産は人口の稠密化を可能にしたが、人口の集中は同時に疫病をもたらした。農業灌漑システムの導入は、ヒトや家畜の集中を伴い病原媒介節足動物である蚊に吸血源を提供した。また湿潤なイネの群叢は蚊の生存率をたかめ疾病媒介能をたかめる。主要な食糧生産の場である農地では、マラリアや日本脳炎、フィリリアなどの病原微生物を媒介する蚊の好棲息地であり住血吸虫も繁殖しやすい。

農耕開始以降、人間の世界中への拡散は加速されたであろう。人類は草原や山岳地、砂漠といったさまざまな地形を克服し、熱帯、温帯、寒帯とあらゆる気候変化にたえて生活するようになった。極北に住むエスキモー、砂漠に住むブッシュマン、熱帯雨林の奥深くに住むピグミーなど、人類はあらゆる環境に進出していった。地球研「高所プロ」が研究

の対象とする「高地」、すなわちチベット高原、アンデス高地、エチオピア高地等も例外ではない。しかし、現在の社会・経済のグローバリズムは、これらの高地にも確実に波及しており、さまざまな変容をきたしていることが推測される。地球研「高所プロ」では、これら高地とそこに住む人々にかかわる諸問題を時空をこえて明らかにし、高所という過酷な環境のもとで高地民族が営々と築いてきたローカル・ノーレッジとそれに由来する文明を考察しつつ、高地におけるコンテンポラリーな環境問題を解き明かしてゆきたいと考えている。

学際的な本誌を通じての、いっそう活発な討論を期待するものである。

編集委員を代表して：松林公蔵